

# 保育研究のあり方をめぐって

無 藤 隆

保育を研究すると言っても、様々の立場から保育の様々な側面について検討することができる。

ここでは、特に子どもの発達ということと、その発達が保育現場においてどのように現れ、保育者や保育環境によりどのような働きかけを受け、影響されるのかという面を中心に考えてみよう。

まず必要な検討は、発達をどのような方法でとらえていくかである。次に、その発達と実践との関わりをどうとらえるかという問題がある。第三に、特に研究を進めていくに当たっての方法論的なポイントがあるだろう。

発達をどうとらえるか

ここでは、発達とは何かという大きな問題を論ずるのでなく、子どもの発達の研究をその普遍的な像と個性的な像の間の緊張関係とその往復という面でとらえてみたい。

まず必要なことは、ある年代において当てはま

るはずの共通の像をとらえることである。そして、それを人間がどのように発達していくのかの普遍的な姿へと一般化することである。

何歳にはこれができ、あれができる、こういうことをする、ああいうことをするといったことが、研究の初めの段階の資料になる。しかし、それが即ち発達ということではない。そのような子どもの具体的な行動を生み出す内面的な子どもの動きと変化に発達の一方の局面がある。それは、すべての人間が普遍的に通過するものとしてとらえられるはずである。したがって、多くの子どもが全体としてどのようなことをするのか、その平均像が発達をとらえる上での一つの出発点になる。同時に、それにとどまっているのでは不十分であり、人間とは何かという問いに向けて考察を深めていく必要があるのである。

第二に必要なことは、必ずしもあらゆる子どもに共通ではない面の検討である。特に、子どもの

タイプとかスタイルといった面をとらえることが必要である。子どもをいくつかの類型に分けると、そしてその類型に応じて発達の動きをとらえること、つまり発達を複線的にとらえるのである。全ての子どもが同様に通過する面もあるが、同時にいくつかの類型毎に異なった道筋を通ることもあるだろう。いわゆる個人差というだけではなく、特定の子どもが持つスタイル、そしてそのスタイルに似た様式を持つ多くの子どもたちがほぼ同様に進んでいくコースをいくつか同定することができる。

第三に必要なことは、一人一人の子どもの姿、またその動きをとらえることである。その個性の把握は、発達研究の枠組みを通常超えるものである。しかし、保育実践においては、常に、一人一人の子をとらえるという課題から目を反らすことはできない。しかし、実は、個をとらえることにとどまっていたは、その個性すらとらえることが

できないのである。普遍的な像、様々な類型としての像、つまり、そのような抽象化と、他方での個性的、個別的な像との往復によって初めて、一人の子どもの全体的な像をとらえることが可能になる。子どもは個性的に存在すると同時に、普遍的に存在する。その両極の間の深まりこそが保育に関わる発達研究の目指すべき方向であろう。

### 実践をどうとらえるか

発達研究を、具体的な保育現場においてどう生かすかという問題だけでなく、実は、発達研究を行う上においてすら、保育を含めた様々な場との絡み合いを問題にせざるを得ない。つまり、発達研究が基礎的で、その応用の場として保育実践があるというのではない。本質的に、発達はそのが生じる場と絡み合っているのである。

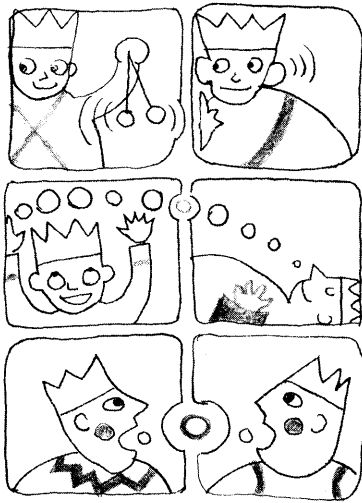
しかしまた、子どもの発達をとらえるという問題の志向と多少とも異なったところで、保育実践

の問題をとらえるという思考の志向は成り立つ。そこでの最小限必要なくつかの事柄と、そして発達研究と結びつけるための若干の枠組みをここで述べておこう。

その第一は、いま述べたように、発達というのが子どもの内面においてのみ生ずる事柄ではないのだという認識である。本質的に、人間そのものが、そして発達という事柄自体が、人間が過ごす場や生活と絡み合って展開していく。周りの場や環境が影響要因として重要だということだけを述べているのではない。そうではなく、人間のあり方自体が周りのあり方と絡み合い、区別し難いのだということである。したがって、成達は常に、子どもの内部的变化と同時にその外部との関わりの変化なのである。その意味でこそ、保育研究や教育研究あるいは家庭の研究が、発達研究のいわばもう一つの面だと言えるのである。

では、成達と場との絡み合いをどのようなこ

ろからほぐしていけばよいのだろうか。それが同時に、保育実践をどうとらえるかの視点でもあるはずだ。まず、保育の場における様々な物や人のあり方をとらえなければならぬ。端的に言って、どのような物があり、人があり、それらほどどのような動きを見せ、姿を見せるのか。それに対して子どもはどのように関わっていくのか。能動的にあるいは受動的に、またどのような関わりスタイルを見せ、どのような感情を示すのか、ど



のような工夫をするのか。それらが環境の個別要素とともに、あるいはその個別要素のパターンと併せて、検討されていかなければならない。

第二に必要なことは、保育の場に関わる大人の意図であり、その意図による働きかけの様相である。保育の場は、子どもがいわば自然に存在している場ではない。明らかに、文化と伝統に生きる大人が教育的な意図をもって構成している場面であり、なんらかの教育的な意図をもって教育的に

働きかけている場面である。したがって、その大人はどのような理論をもって子どもをとらえているのか、どのような知識のもとに望ましい働きかけをイメージしているのかが検討されるべきである。単に、何を意図するかだけでなく、子ども自身、また周りの環境要素をどのような意味をもつものとして把握するのか、さらにそれを具体的な行為の中でどのように表現しているのかを分析する必要がある。

第三に、大人の背景にある伝統や文化また制度といった面の分析は欠かすことができない。ある意味では、そのような背後にある伝統や文化や制度の代弁者として大人は行動している。もちろん、一方的な代弁者でなく、一つには大人自身の個性によってそれが媒介され、他方で相手である子どもの個性によりまた環境の独自性により変化をこうむるに違いない。まさに、そのような媒介や変化こそが、文化や伝統に新しい変更をつけ加

えるものであり、子どもにとって制度を生きたものに作り替えていく契機となるものである。

それにしても、どのような伝統があるのかということまでをとらえなければ保育実践を理解することはできない。保育は常に、一回限りの個別的な出会いであると同時に、無数に繰り返される伝統と文化の現れなのである。保育は、教育の一部として、文化の再生産、伝統の再生産である以上は、それは当然のことであると同時に、まさに具体的に一人一人の子どもを相手にするが故の変化をこうむるものでもある。

#### 研究の方法をめぐって

ここで、発達と保育実践の関連に対する研究の方法の全体を述べる余裕はない。個別的方法を論ずる以前の、研究が研究として成り立つための最も基礎的な要件について、特に四点を述べておこう。

第一は、保育を問題にする限りにおいて、そこでの研究の方法というのは、日常的な思考を精緻化したものであるということである。研究者は、研究以前の日常生活に生きている人間として様々なことを感じ、考える。その時に用いている様々な手だての延長線上において、研究が開かれるのである。もちろん、様々な機材を使ったり、様々な学問的な難しい方法を使うことはあろう。しかし、その始まりは日常の思考のあり方と感じ方の展開にある。なぜならば、まさに日常的に行っていることが保育実践であり、そしてその中で考えざるをえないところに研究の出発点があるからである。日常的に考え、感じていることが、研究の対象であると同時に方法でもあるはずだ。第二に、しかし日常的な思考と違って、それが研究であると呼ばれるためのいくつかの条件があるはずだ。その一番大きなものは、研究論文を書いて、自他に示す段階において、結論へと至る根

拠が明確化されることである。なぜ特定の結論が得られるのか、単に「私はこう思う、こう感じる」ということではなくて、その感じ方、考え方の根拠がその論文の中で示される必要がある。

それは容易なことではない。しばしば日常的な思考においては、我々は根拠を自覚することなく特定の結論を引き出す。それがむしろ日常的というこの意味であるのかもしれない。そのような結論に至る過程を改めて解明し、その根拠を多少とも明確化することが必要である。もちろん、パーセント明確化することはできない。おそらく、人間は膨大な「資料」を利用しながら生きているからである。また、暗黙に理解されている様々な体系に依存して生きているからである。それにおいても、多少ともその根拠を明確化することにおいてのみ、研究は研究としての価値をもつ。そして、根拠を明確化する努力のなかで、何がまだ明確に出来ないのかもまたはっきりできるのだら

う。限界をもたない研究はなく、限界を明示できない研究に価値は乏しい。

第三に、研究が研究と呼ばれるためには、先行する様々な諸研究との違いを明確化し、何が自分の新しい発見であるのかを提示する必要がある。単に、自分が思いついたことを書くのは研究以前のメモに過ぎない。先行研究で扱われていないことや不十分にしか扱われていないことを取り上げて、自分はそれに新しいことを加えたとか、これまでの考え方を変更したということを主張するとき、研究が研究論文として成り立つ。

第四に、研究は常に他者と共有され、また他者の意見を取り入れながら、そして自分自身の変化する考えを含み込みながら発展し、展開していくものでなければならない。言い替えれば、研究というものは、そこで完成するということはあり得ない。また、他者に理解される形をとり、他者からの反論を引き起こし得るものでなければならな

いのである。そして、時間がたって、自分が改めて読み直し、自分自身もまたそれに反論できるような形をとる必要がある。

以上四点は、ある意味ではきわめて当たり前のことかもしれない。しかし、実は、それらを適切に守り、実行することは決して容易ではない。保育実践をとらえ、そこでの発達の様相を見きわめるという課題において、以上の四点を真剣に考えながら研究を進めていくことは、むしろ大きな挑戦になるはずである。

(お茶の水女子大学)